

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会  
(西北地区) (第3回) 概要

日時：平成29年1月25日(水)

13:30～15:30

場所：プラザマリュウ五所川原 1階 アリシア

<出席者>

委員

長尾 孝紀 委員、葛西 嶺輔 委員、神 豊 委員、坂本 寛 委員、  
木村 研二 委員、中野 雄臣 委員、加藤 久宜 委員、今本 宏樹 委員、  
飯島 正和 委員、安田 博 委員、長内 一 委員、野呂 良悦 委員、  
木村 文紀 委員、佐井 憲男 委員(進行役)

オブザーバー

野村 卓司 県立五所川原高等学校長、 藤澤 重信 県立金木高等学校長、  
吉田 健 県立木造高等学校長、 百川 弘通 県立鱒ヶ沢高等学校長、  
米持 聡 県立板柳高等学校長、 前田 濟 県立鶴田高等学校長、  
笹森 昭好 県立中里高等学校長、 山口 章 県立五所川原農林高等学校長、  
三上 浩 県立五所川原工業高等学校長、 成田 安男 県立森田養護学校長

1 開会

2 教育次長挨拶

平野教育次長から、挨拶があった。

3 事務局説明及び意見交換

(1) 資料1-2「1 西北地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み」及び「2(1) 重点校、拠点校、地域校について」

事務局から、資料1-2及び資料2について説明した。

委員から、次のような意見があった。

- 重点校に関しては、下北地区でも生徒数の関係で5学級規模としており、西北地区でも5学級規模で対応してほしい。大学進学を考えると、教員配置等の面から、五所川原高校はこれからも5学級規模を維持してほしい。他地区と競争していかなければいけない。

また、西北地区は農業と工業が地域産業の両輪なので、五所川原農林高校と五所川原工業高校には配慮してほしい。

地域校については、地理的条件から中里高校と深浦校舎が候補となるのは順当だが、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満

となった場合、募集停止等に向け市町村等と協議することになる。そう考えると、鱒ヶ沢高校と金木高校が第1期実施計画期間中に募集停止になり、更に中里高校と深浦校舎が基準に該当した場合、西海岸地域と津軽半島北部から高校がなくなることになるため、第1期実施計画期間中は鱒ヶ沢高校と金木高校の配置を維持してほしい。

- 基本方針の中では、学校規模の標準を1学年当たり4学級以上、重点校は6学級以上、拠点校は一つの専門学科で4学級以上としている。

西北地区の状況として、生徒数が年々減っている中、この標準に当てはめるとますます統合していくことになる。重点校に入学できない生徒のことを考えると、統合を検討する際には4学級や6学級という標準に縛られずに、西北地区の状況を考え、重点校は6学級が標準だが5学級で配置していくなど柔軟に対応すると、地域に高校を残すことも考えられるのではないか。

- 少なくとも平成34年度までは、現在4学級ある学校は学級数を減らさないでほしい。なぜなら、西北地区全体のことを考えると、大規模校を残すことを優先させないといけないからである。木造高校、五所川原工業高校は生徒の志望倍率が高い。この2校を学級減すると生徒の夢を壊してしまう。他地区や他県と勝負することを考えると、木造高校や五所川原工業高校の学級を減らしてしまうと、結局重点校と拠点校だけになってしまう。学級数が少なくなると、部活動で頑張りたい生徒は、私立高校や他地区に流れてしまう。4学級以上の学校の学級数を減らすべきではない。また、西つがる地域には木造高校1校では少ないと思う。

- 重点校は5学級で良い。拠点校について、第2次進路志望状況調査では五所川原農林高校は0.85倍と1倍を満たしていない。一方、五所川原工業高校は1.29倍と40人ほど不合格になる。拠点校の4学級は決まっていることだが、この志望状況を見ると、将来的には、五所川原農林高校と五所川原工業高校の統合による農工に特化した専門高校の新設も検討すべきではないかと考える。また、地域校については定員充足率を見ていく必要がある。連携校についても、西海岸地域と津軽半島北部の遠方地帯では、1学級規模でも良いので配置すべきと考えている。

## (2) 資料1-2「2(2)委員の意見に基づく学校配置シミュレーション」

事務局から、資料1-2及び資料2について説明した。

- ①「ア 平成29年度に生徒を募集する全ての高校を配置する場合」について  
委員から、次のような意見があった。

- このシミュレーションの効果として、高校進学を希望する生徒に高校教育を受ける機会を提供できる。ただし、学級数が減った場合であっても教育内容を維持できるのか。生徒にとっての魅力が維持できるのか。子どもたちに選択肢を与えることは重要だが、その場合、生徒にとって魅力ある教育ができるのか心配である。
  - 地域のことを考えると、学校が残ることは良いのだが、1学級規模で配置した場合、その学校に子どもたちは果たして進学するのだろうか。
  - 重点校、拠点校を大事にすべきとの意見があったので、それを前提にするが、例えば学級数が1、2学級になると、今までできたことができなくなることが想定される。しかし、それ以上に津軽半島北部や西海岸地域などでは、高校に通学できなくなる環境の方が辛いのではないか。学校規模が小さくなくても、重点校、拠点校、連携校を選択できる環境を当面維持していくことが大事と考える。
  - 重点校は五所川原高校だが、木造高校にも学力の高い生徒が入学している。しかし、学力があまり高くない生徒のことも考えていく必要があるため、平成34年度頃までは全地域に1学級規模でも高校を配置し、統合は生徒数の減少に応じ、その後の計画で考えれば良い。1学級規模では教育効果などの面も危惧されるが、臨時講師でも良いので各学校に配置し、ある程度の科目を開設して、学力面に対応してほしい。
  - 平成29年度に配置している学校は全て残すべきである。平成34年度までは現在の配置を維持することで、今後の方向性が見えてくる。その後で統合等を検討すべきである。それまでにいろいろな状況が明らかになるので、その時点で対応策を考えれば良い。
  - 今回示された学校配置シミュレーションを見ると、どうしても数合わせに見える。西北地区の場合はどうしても生徒が五所川原市に集中していく。中泊町や深浦町はその輪から外れていく。高校教育改革を急ぐ必要があるかもしれないが、地域の実情に配慮し、平成34年度までは様子を見てほしい。また、地域校について、2年間継続して基準に該当すれば募集停止を協議することになるが、地域の意見を十分に聞いて、地域の納得を得てから進めてほしい。一律には進めないでほしい。
  - 事務局に確認したいが、なぜ木造高校が重点校にならないのか。なぜ五所川原工業高校が拠点校にならないのか。
- (事務局) 青森県立高等学校将来構想検討会議の答申等を踏まえ、重点校は普通科等の学校を候補校としたところである。

- 木造高校は総合学科だから、重点校にならないのか。
- (事務局) 総合学科は別途検討することになる。
- 保護者は重点校や拠点校の仕組みを知らない。だから、重点校等の格付けは不要である。
- (事務局) これまでの地区懇談会等でも説明しているが、今後も第1期実施計画(案)に関する地区懇談会等で重点校等の趣旨を周知していきたい。
- 私立高校は、スクールバスを運行し手厚く生徒を送迎することなどにより入学者を集め、学校規模を維持していることもあり、中学生がどう選択するかということも念頭に置かなくてはいけない。また、生徒同士で学び合う面もあり、小規模になると生徒同士の切磋琢磨が難しくなるという側面もあることから、事務局において更に検討していただきたい。

## ②「イ 五所川原農林高校と五所川原工業高校を統合して新設校を配置する場合」について

委員から、次のような意見があった。

- このシミュレーションは課題が多過ぎる。弘前実業高校を例にとると、生徒数が非常に多い段階での統合だった。今回の五所川原農林高校と五所川原工業高校の統合は発展的な統合ではなく、縮小する方向での統合である。教員の配置も農業系と工業系の問題があり、中途半端な構成になる懸念がある。また、施設面でも、五所川原工業高校の校舎は改築したばかりである。五所川原農林高校は広大な敷地がある。農場にはこれまで何十年間もかけて育ててきた作物などもある。それを、今後5年間で統合というのは、現実的ではない。
- このシミュレーションは考えにくい。第2期実施計画で統合しても学級数が変わらないのであれば、統合する意味がないのではないか。五所川原工業高校は志願倍率が1倍を超えており、工業高校として配置する必要があるのではないか。また、全ての高校を配置する必要もあるのではないか。学校がなくなると、地域そのものが衰退する。今すぐこの学校配置案を決めなければいけないのか。
- 以前の会議で、両校の校長から、統合により専門性が失われてしまうため、統合することのメリットがあまりないとの意見があったと思う。  
また、専門的な施設設備や敷地を抱えているので、校舎が離れた状態で統合するのであれば、教員や生徒の行き来などで非常に困難を伴う。しかも学級数を減らすと教員の確保が難しくなる。最初は良いアイデアだと思ったが、現実的には困難だという思いに至っている。

進行役から、学校の実情について、オブザーバーである五所川原工業高校長に情報提供を求めた。

- 工業高校として残すことにより、専門性が確保される。他県でも工業高校が農業科や商業科と統合している例があるが、やはり専門性が薄れ電気工事士などの資格取得者が減っている。工業は工業、農業は農業としてそれぞれのエキスパートが誇りを持って指導することが必要ではないかと考えている。

③「ウ 金木高校、板柳高校、鶴田高校を統合する場合」について

委員から、次のような意見があった。

- 地域校である中里高校の将来像が決まっていない中、金木高校を含めて新設校を配置するのは止めてほしい。地域校である中里高校は、金木高校との関係が出てくる。地域の保護者も断固反対すると思う。そもそも、3校を統合しても、どこに学校をつくるのか。それぞれの地域のエゴが出てきて、市町村合併と同様に大変難しい話になる。
- 新設校を設置した場合、当面4学級規模を確保できるが、将来的に生徒数は減るので、4学級規模を今後も維持できるか疑問に思う。統合しても4学級以下になるのであれば意味がないと思う。  
離れた場所の高校を統合することに関して違和感はない。子どもたちの将来のことを考えると、4学級規模を維持してほしい。

④「エ 第1期実施計画では金木高校、鱒ヶ沢高校、板柳高校、鶴田高校を1学級規模で配置し、第2期実施計画で統合する場合」について

委員から、次のような意見があった。

- この案が現実的だと思う。地域の高校の存続は町にとって重大な関心事であり、高校がなくなると地域力がなくなる。金木地域でも、前回の会議の様子が新聞に載って、地域の方々も金木高校存続を考える会として活動し、今日も大勢傍聴に来ている。地元の高校がなくなりそうだとすることを、地域の人たちも現実的に肌で感じている。そう考えると第1期実施計画期間中は1学級規模でも良いので残して、その中で地域と高校が一緒になって高校を盛り上げていって、第2期実施計画の段階では子どもたちが減っていくので、新設というよりは廃止の方向も考えていくと地域の人が納得するのではないか。私たちも子どもたちのために頑張らなければいけない。そういう段階を踏まないと、平成30年度から統合というのはショックが大き過ぎる。西北地区は地理的状况から他の地区と比べて特殊であり、2学級でも高校を配置してきたので、前半は緩やかに統合してほしい。

- 私も今ある学校を残してほしい。そして、更に生徒数が減る第2期実施計画の段階で再度考えた方がよい。第1回地区意見交換会において、新設校を配置した方がよいとの話をさせてもらった。将来的にはそうなるだろうが、焦らず平成39年度頃の新設でよいと考える。
- 重点校、拠点校、そして連携校への進学を選択できるようにしてほしい。中学生の99%が高校に進学する状況になっているので配慮してほしい。専門性を生かす工業高校や農業高校も西北地区にとって大事であり、それらの学校をしっかりと配置すれば、連携校の学校規模が小さくなったとしても、選択肢として残した方が地域では受け入れやすいのではないかと思う。統合に直接関係する地域からすれば、1、2年で話を進めるというのは避けるべきであり、地域の納得を得ながら10年スパンで考えるべきではないか。
- 小規模校については、ただ配置するだけではなく魅力ある学校づくりをしなければ生徒に選んでもらえない。
- 正直、統合はしてほしくない。自分の母校がなくなるのは非常に悲しいことである。ただ、生徒数の減少は回避できない状況である。そのため、深浦校舎はたとえ1学級であっても生き生きと過ごせる環境を目指して、鱒ヶ沢高校、中里高校と連携しながら、今後も地域おこしを進め、子どもに地元愛を植え付けさせたい。深浦町観光協会の立場で学校に訪問しているが、学校にも理解してもらい、子どもたちが生き生きと活動している環境を変えてほしくない。教員は人事異動するが、今の取組を存続できる環境整備をお願いしたい。

進行役から、小規模校の実情について、オブザーバーである鱒ヶ沢高校長、木造高校長、中里高校長、鶴田高校長、板柳高校長及び金木高校長に情報提供を求めた。

- 鱒ヶ沢高校では中里高校、深浦校舎と連携してSBP活動という、高校生の発想を生かした地域おこしに取り組んでいる。3校の生徒が生き生きと活動しており、町や観光協会なども広報活動などでバックアップしてくれるようになった。鱒ヶ沢高校は小規模校ではあるが、それを利点として捉え、校外活動を経験することで達成感や充実感を得、それが自信につながり社会で通用する人間づくりを目指している。卒業生が5年後、10年後に地元に戻ってくるのではないか、町のために何か貢献してくれるのではないかと期待している。

- 木造高校深浦校舎は、全ての生徒が深浦町出身である。小規模校だが、総合学科という特徴を生かして、昨年は十二湖の整備計画に携わり全国表彰を受けた。また、町散策コースの考案など地域に根ざした活動を行っており、これが地域の学校の役割である。  
小規模校のメリットとして学年を超えた生徒同士の触れ合いなど、大規模校にはない取組も見られる。一方、4学級規模の木造高校では生徒同士が同じ目標に向かって、切磋琢磨するという面も見られる。子供の夢を壊さないように、「オール西北」での対応という、20年後を見据えた発想も必要かもしれない。
- 中里高校も小さい学校だが、第1回地区意見交換会において、大規模校に負けないよう頑張っていると話させていただいた。複数の部活動に所属して頑張っている生徒もいる。地元の支援もあり、小泊地域からスクールバスを出していただいたり、車力地域からタクシーを運行して生徒を通学させてもらっている。地域と結びついている学校であり、小規模校の短所を長所として捉えるようにしている。  
教員配置については、専門の教員が全員配置されることはない。ただ、本校の生徒にとって、例えば物理という科目は進路選択にあまり影響がない。開設科目を工夫して県教育委員会から示された定数で学校運営している。
- 鶴田高校は、小規模校として個々を生かした教育を念頭に置いている。今の3年生は、入学した生徒が一人も欠けることなく卒業することを目指している。鶴田町以外からも半分近く入学しており、町というより地域の学校として活動している。それぞれ効果も課題もあると思う。今後とも、学校を預かる者として、入学する生徒に対して責任を持って教育していく。
- 板柳高校も在籍生徒数は少ないが、町のボランティア活動に携わらせてもらうなど、生徒の情操教育に取り組んでいる。  
西北地区は、他地区に流出する中学生が他地区より多いと思っている。統廃合と同様に、どういう学校をつくれれば他地区に流出する生徒に入学してもらえるかという視点も大事であり、そういうことも含めてどういう配置が良いかなどという意見も必要だと思う。そのことも念頭に置いて意見交換を進めてほしい。
- 金木高校も少人数の学級をさらに細分化して、習熟度別授業やチームティーチングを行うなど、魅力ある学校づくりに努めている。今は地域の方が金木高校に関心を持ち始め、本校の魅力化について御意見を伺っている状況である。

本校の所在地である五所川原市金木町は、太宰治や津軽三味線など豊富な地域資源があり、これまでも地域学など様々な授業を展開している。これに更に磨きをかけていきたい。

⑤「オ 第1期実施計画では普通科の連携校4校を統合し、更に第2期実施計画で五所川原工業高校を統合する場合」について

委員から、次のような意見があった。

- どうしても五所川原工業高校を統廃合しなければいけないように見える。西北地区で一番人気のある学校を統廃合するのはおかしいのではないかとというのが率直な意見である。学校は勉強するところだが、部活動など勉強以外に集中する部分もある。五所川原工業高校には全国大会に出場するような部活動もあり、部活動のために他地区から五所川原工業高校に生徒が来ているとの話も聞く。そういった魅力ある学校にもかかわらず、五所川原工業高校を統合するシミュレーションはあり得ないのではないか。
- 五所川原工業高校の学級減は、西北地区の産業構造と関わってくる。五所川原工業高校の卒業生はこれまで就職先がないため大学に進学する生徒もいたが、五所川原市内にあるポリテクカレッジは就職率100%である。ポリテクカレッジの卒業生は地元に残り、将来的に地域の中核となる。五所川原工業高校は時代に合った学科に改編しながら、存続させてほしいし、五所川原工業高校を学級減していくというのは、絶対反対である。

⑥「カ 金木高校と鱒ヶ沢高校の配置を継続し、連携校4校を統合し新設校を配置する場合」について

委員から、次のような意見があった。

- 西北地区は広大な地域であり、今の地域校の状況から、10年スパンで考えると、統廃合は今のタイミングではないと思う。将来は統合することになるだろうが、西海岸地域と津軽半島北部には、小規模であっても高校を設置しておくべきと考える。
- 平成30年度から生徒急減期であり、統合を覚悟しなければいけない。金木高校、鱒ヶ沢高校は地域校との関係がある。地域校は淘汰されていくので、金木高校と鱒ヶ沢高校は配置を継続していく必要があると考える。その中で連携校の統合もあり得るのではないか。保護者のニーズや子どもたちの志望もある。産業高校として、工業科、農業科に加えて商業科や福祉科も学べる学校があっても良いのではないか。どういう人財が必要になるかという視点で、学級数が多ければ充実した配置になるが、それ以外の



学校は県で人を配置すれば良い。10年スパンで考えれば、色々な課題も見えてくる。そうってから徐々に再編を進めれば良い。

- 数合わせを急ぐべきではない。深浦町、中泊町のことを考えると、鱒ヶ沢高校と金木高校は是非存続させてほしい。岩崎中学校の卒業生の半分は深浦駅発5：23の鉄道で秋田県の岩館駅で乗り換えて能代市の高校へ通っている。鱒ヶ沢高校がなくなると、ほとんど全員が能代方面へ行かざるを得なくなり、ますます通学環境が悪くなる。今の深浦町内の小学校の在籍児童数から、深浦校舎の募集停止は予測される。統合について地域住民と話し合っていかなければいけないことはたくさんある。

進行役から、重点校の5学級規模を維持することにより、これまでより幅広い学力レベルの生徒が入学してきた場合の対応策について、オブザーバーである五所川原高校長に情報提供を求めた。

- 現在の五所川原高校の生徒の実態として、学力的に高くないレベルの生徒も入学してきている。ただ、5学級規模がないと他地区の重点校と競えない。また、教科のバランスや教員確保の点を考えると、最低でも5学級は必要と考える。

進行役から、拠点校の対応について、オブザーバーである五所川原農林高校長に情報提供を求めた。

- 日本はどんどん人口が減っており、農業は日本国内の流通だけでは先細りになる。一方、世界では人口が増え続けている。世界で農産物を高く売る取組をしていかないと、日本の農業は衰退してしまうということから、グローバルギャップの取得に取り組んでいる。日本の農業を支えるのは今の高校生であり、世界の常識や世界の農業のマーケットに出て行くためのビジネスについて教えている。地域のリーダーが出来れば良いと思い、中学校3年生程度の英語、基礎的な簿記、マーケティング等の知識を駆使できる力や、コミュニケーション能力を身に付けさせるなど、農産物を作るだけではなくビジネスを教えていかなければいけない。拠点校としては、20、30年後を支える人財を育成しようと考えている。

### (3) 資料1-2「2(3) その他の意見」及び「3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見」

事務局から、資料1-2及び資料2について説明した。

#### ①「2(3) その他の意見」について

委員から、次のような意見があった。

○ 第1期実施計画期間中は金木高校と鱒ヶ沢高校を残してほしい。他の学校も地域との関わりが大きいので、小規模で残してほしい。ただ、第2期実施計画では現実的に統合も仕方がない。第1期実施計画期間中は緩やかな再編をお願いしたい。また、学校を残してほしいというのなら、市町村側でも支援する必要があるのではないか。市浦地域の生徒もスクールバスで月2万円弱払って五所川原市内の高校へ通学している。小泊地域を考えると、金木高校が残ると小泊地域から1時間程度で通学できる。第3回まで地区意見交換会を開催して、地域の人たちが高校のことを考えるようになり、地域の教育を考える良い機会になった。

○ 基本的に、全ての生徒に充実した教育環境を与えたいということから、五所川原高校、木造高校、五所川原農林高校、五所川原工業高校の4校に集約する統合案を今回提案した。この案だと全ての学校が学校規模を維持できることになり、部活動でも勉強でも充実できるのではないか。遠方の生徒にはスクールバスを出して送迎してもらえれば良いのではないかと考えた。

○ 参考資料として配られている第1次志望状況調査と第2次志望状況調査について、中学校の現実をお知らせしたい。

第1次志望状況調査の時点では子どもが本当に行きたいところを志望し、第2次志望状況調査の時点では成績等を考えて現実的に進学可能な学校を志望する傾向にある。

第1次志望状況調査と第2次志望状況調査を比較したときに、木造高校が30人、五所川原農林高校が20人、五所川原工業高校が10人志望者が減っている。しかし、普通科の連携校4校は合計しても志望者が1人しか増えていない。地域校は2名しか増えていない。これは、人気のある学校の志望者で減った60人は私立高校に流れている可能性が高いためである。現在、私立高校の推薦入試がピークであり、引率した教員の印象だが、推薦入試で150名程度が第一希望を私立高校にしているようである。木造高校が無理だと、遠くの連携校に行かずに私立高校に進学する傾向が強い。

現在、木造高校と五所川原工業高校で8学級規模、連携校4校で8学級規模あるが、10年後にはこのうち8学級を減らさなければいけない。木造高校と五所川原工業高校の学校規模をそのまま維持すれば、連携校4校を配置することはできない。逆に連携校4校を維持するなら、木造高校と五所川原工業高校をそのまま募集停止することになる。今日の議論を伺うと、連携校をぎりぎりまで残さないと地域の利益を守れないとのことである。ぎりぎりまで連携校を残せるなら残して、どうにもならない状況になれば五所川原工業高校の学級を減ずるという対応も考えられる。

地域の利益を取るのか、子どもを優先するのかを、地域のエゴではなく、公平に考えていただきたい。木造高校、五所川原工業高校はどこかで譲らないといけないし、連携校もどこかを譲らないといけない。非常に難しい落としどころだと思う。

統合によって地理的に不利になる部分を補てんするには、金銭面での補助ぐらいしか対応策はないのではないかな。

## ②「3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見」について

委員から、次のような意見があった。

- 北斗高校は志望倍率が高い。3部制なので、希望する生徒が多い。高校を中退した生徒は、資格を取れず就職できないので3部制の高校が駆け込み寺になっている。それを県教育委員会は県の中央部に集めているので、各地区に配置してほしい。北斗高校は通信制も併置しており、頑張れば3年で卒業できるので、高く評価している。

## (4) その他

委員から、次のような意見があった。

- 最後に確認したいが、実施計画策定の段階で、県教育委員会は私立高校の関係団体との協議は行うのか。

→ (事務局) 私立高校については、毎年2回情報交換の場を設けている。実施計画策定に当たって特別の場を設けるのではなく、そこで情報交換していく。

- 子どもたちは勉強したい学校に行く。しっかり協議してほしい。

- 今日の議論としては、地域の活性化や、生徒が通学しやすい環境を考慮してほしい。ただ、そのためには各校とも地域の支援をいただきながら魅力を高めていかないと生徒が志望しなくなるとのことだった。

また、生徒たちの志望として、ある程度の学校規模を維持しないと私立高校に流れる。私立高校も県立高校の授業料分は国から補てんされるので、前より負担が少なく進学できるようになった。県立高校が魅力的になって私立高校に立ち向かっていくためには、再編など教育内容の改善に向かっていくことになるとのことだった。

進行役から、事務局に対して今回の地区意見交換会の内容を踏まえ、資料1-2を修正するよう指示があった。また、進行役が、修正内容を確認の上、当地区における主な意見として県教育委員会教育長に報告することについて委員に承諾を求めたところ、異議はなかった。

4 教育次長謝辞

平野教育次長から、謝辞があった。

5 閉会